

ネットにつながる、つなげる ICT 活用

長岡市立表町小学校 教諭 水谷 徹平, 教諭 高野 真也

キーワード：効果的な授業、児童生徒の資質・能力向上、ICT 活用指導力向上、保護者や地域への情報発信

実践の概要

コロナ禍において、ICT を活用して子ども同士や学校と家庭がネットにつながる、つなげる取組を進め、仲間意識の持続やストレスの軽減、新しい生活様式に即した行事の実践を図った。また、気をつけた方がよいことを考え、情報化社会に参画する態度の育成を図った。

1. 目的・目標

文部科学省は「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン及び新型コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の『学びの保障』総合対策パッケージについて」において、「教科書及びそれと併用できる紙の教材、テレビ放送、オンライン教材・動画、同時双方向型のオンライン指導等を組み合わせた家庭学習を課すとともに、登校日の設定や家庭訪問の実施、電話や電子メールの活用等を通じて教師による学習指導や学習状況の把握を適切に行い、児童生徒等の学習を支援する必要がある」と示した。そして、「個人でも実施可能な学習活動等は授業以外の場で実施」、「ICT 活用によるオンライン学習の確立」を行い、「きめ細かな健康観察やストレスチェック等により、児童生徒等の状況を的確に把握」しながら「授業を協働学習など学校でしかできない学習活動に重点化し、限られた授業時数の中で効果的に指導」することを示した。臨時休校で友達と会えなかったり、活動が制限されたりする状況で、ICT を活用して、子ども同士や学校と家庭がネットにつながる・つなげる取組を進めることで、仲間意識の持続やストレスの軽減、新しい生活様式に即した行事の実践を図った。また、ネットを介してつながるときに気をつけた方がよいことを子どもとともに考え、情報化社会に参画する態度の育成を図った。

2. 実践内容

2.1 学級活動×ICT

当校では、感染症拡大防止の観点から、4/28 から臨時休校となり、5/13 から分散登校開始、6/1 から制限はありながらも通常登校開始となった。

臨時休校下における学習支援やつながることを目指し、4/22 に学校で Zoom 体験、4/23 に家庭からの Zoom 接続試験を行い、臨時休校下で Zoom による朝の会、学習に関わるお悩み相談を行った。朝の会で音声、「反応」機能、チャット機能で健康観察をし、臨時休校下でも顔を見てコミュニケーションができるツールとして機能した。市のモデル推進校としての取組であり、個別チャットの禁

止やホスト機からのミュートコントロールなど、問題点を洗い出し、合計7本のレポートとして Zoom での朝の会を含めた ICT 活用の実践的知見を共有できた。

家庭では、学級の19人中17人は自力で Zoom に接続でき、ネット環境がない2名は、学校の学習室で Zoom による朝学活や学習支援に参加し、顔を見てのコミュニケーションを行えた（写真1）。



写真1 Zoom での朝学活

2.2 健康観察×ICT

休校中における家庭との双方向の連絡手段として、C4th Home&School を使用した健康観察を行った。臨時休校に入る前に、全家庭の保護者にアプリのインストールを依頼し、1家庭を除く全戸で、アンケート機能を用いた健康状態の確認を毎日行った（写真2）。前日に送信予約を行い、朝9時までに連絡がない家庭には再プッシュをするとともに、発熱などの項目にチェックがあった場合には担任が電話



写真2 健康観察の画面

2.3 家庭学習支援×ICT

休校前に全学年でライズ社「E ライブラリ」を使ったオンライン学習の方法を確認した（写真3）。全校では休校期間中に1,365回、2,726分間の利用があった。また、午前の分散登校が始まった5/13以降、午後は Zoom のミーティングルームを開け、教師が学習上の質問や不安なことの話し相手になった。3月来、登校していなかった児童は、Zoom を介して新担任と学習や趣味などについてコミュニケーションを深め、分散登校開始以降、安定して登校を続けるといった効果もあった。



写真3 オンライン学習

2.4 集会活動・縦割り班活動×ICT

登校が可能な状況でも、感染予防の観点から異学年交流は避けている。集会活動や交流が難しい中、JRC（青少年赤十字）登録式・学習会を行った（写真4）。コンピュータ室から動画を配信し、学習会における講師講話、学年代表児童の決意の言葉の発表と共有を行った。また、行えなかった「1年生を迎える会」の代替として、情報委員会が主となり、タブレットで新1年生の名前や好きなものを動画撮影し、昼の給食放送時や児童玄関前にデジタルテレビを設置して紹介した。全校での活動が難しい中、顔を見て情報共有できる契機となった。



写真4 オンラインでのJRC朝会

2.5 ネットでつながるときに気をつけた方がよいこと

6年生では、児童がホストとなってZoomミーティングを開いたり、ゲームでのボイスチャットや、LINEなどでつながったりしている。学習支援等でオンラインミーティングを行うにあたり、情報モラル指導を行った。本時では、教室内で担任がZoomの画面共有機能を用いた授業を行う中で、情報担当教員が名前をなすりすまし、個人チャットで参加児童に話しかけたり、ドローイングで不適切な落書きをしたりした。また、事前に説明をしておき、児童一人が接続できない状況にして授業を進めた。そして、不適切な行動が起こった際に、どう感じたか、またどう行動したかを振り返り、公共的なネットワークを活用する上でどのようなことに気を付けていくかについて考えた（写真5）。

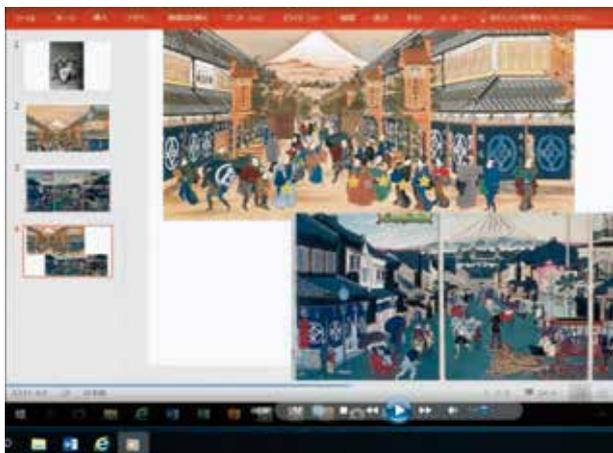


写真5 Zoomでの授業で使用した画面の例

3. 成果

オンライン学習支援のアンケートでは、全員が肯定的に評価し「みんなの表情が見えたり会話ができたりしてよい」、「顔色などで健康状態が分かる」、「先生が教えてくれるから勉強が進む」といった記述があった（図1）。また、情報モラル指導では「ネット上でもやっていた方がいいかは考えなきゃだめ」、「アカウント名を自分と分かるようにして参加した方がいい」といった意見が出て、情報化の光の部分だけでなく、影の部分にどう対応するとよいかを実践的に考える機会となった（図2）。

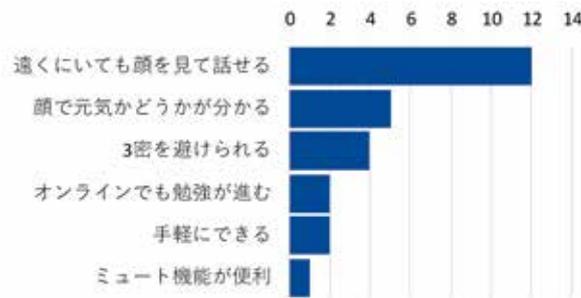


図1 オンライン学習支援のよいところ

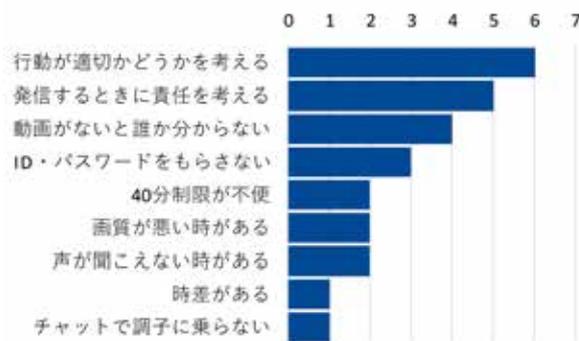


図2 オンライン学習の気をつけるところ

4. 今後に向けて

制限のある教育活動がいつまで続くか分からない中、人と人のコミュニケーションや所属感は、やはり重要である。また、情報化の影の部分に対する配慮など、対話をしながら物事を多面的・多角的に考え、学びに向かうことは、協働的に学ぶからこそ育まれるものである。また、集会活動などが制限される状況であるからこそ、「できる方法で何とか1年生を紹介したい」と、動画を撮影して紹介するなど、相手意識があるからこそその創造的な問題解決が生まれている。

本実践のように、オンラインでの関わりで気を付けた方がよいことを考えるには、関わった経験とセットにすることでより必然ある学びとなる。学校という場、集団での協働だからこそできる学習活動、学習支援とは何かについて、改めて考え、実践的な知見を蓄積していく必要がある。